

“George Silverman’s Explanation”：ディケンズの意匠

溝 口 薫

“George Silverman’s Explanation”: Dickens’s Design

MIZOGUCHI Kaoru

Abstract

“George Silverman’s Explanation” is a short novel written by Charles Dickens in 1867. The story is autobiographical style, narrated by an old priest George Silverman who wrote down his unhappy life for his own solace. The setting is that he has been repeatedly misrepresented and criticized as “worldly” by others in spite of his constant efforts to be otherwise. Dickens’s concern with this story is psychology; he seems to elaborate the process in which the narrator’s guilt-ridden self has been formed with his repressed fear and distrust of the others. In this paper the narrator’s early devastation is examined so that how the repudiation of young Silverman by the others including his mother has entered into his mind to form his wrong self image and unconscious self-defensive behaviors. A close examination of this process and of the author’s treatment of the narrator-protagonist’s subjectivity reveals Dickens’s deep interest in the way self has been formed in close negotiation with the self and others but that begins with bodily perception. The narrator does not get any relief by writing his life story after all. Unable to be free from himself of his mind’s manacles in isolation, he cannot analyze his story of his own self from the view-point of the other, unlike Pip in *Great Expectations*. Yet Dickens seems to be sympathetic toward the tragic narrator on the whole. The narrator, hesitating how to begin the story at the story’s opening, eventually begins to write a confession, not an explanation or a *bildungsroman*. Unlike the purpose-bound writing such as explanation or the modern autobiographical moral self formation story, the less purposeful confession writing allows him to show his whole self that encompasses equivocal nature. Thus his innocent choice of writing will make his text meaningful for his reader with whom he will never intend to share.

キーワード：心理学的関心、文学表現の工夫、間違った自己イメージ、身体感覚、道義心、鏡像、英国国教会牧師、語り手

Key words: psychological concern, literary device, wrong self image, bodily perception, justice, mirror image, Anglican clergyman, narrator

本学文学部英文学科教授

連絡先：溝口 薫 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部英文学科
k-mizogu@mail.kobe-c.ac.jp

I. 序

Charles Dickens (1812-1870) の“George Silverman's Explanation”は、1868年、アメリカの月刊雑誌 *Atlantic Monthly* に1月から隔月3回にわたって連載され、イギリスでは一ヶ月遅れて、同年2月1日より29日まで *All the Year Round* に週間連載された作家晩年の短編小説である。この作品は、ディケンズの小説に特有の、想像力の横溢する事物や都市風景描写、レトリカルで辛らつな風刺、奔放なカリカチュアといった特徴は何えない、むしろ平板で単調な、年取った英国国教会牧師が一人称で語る回想物語である。タイトルにもあるように、その話は、語り手シルバーマン師が、かつて“worldly”な企みをめぐらせたと誤解され、世間から追放されたある醜聞事件についての釈明である。語り手は、その幼少期からその事件に至るまでの自らの半生を含めて物語る。というのも、物心つかないうちから周囲の大人たちに「世俗的な」子供と一方的に決めつけられてきた語り手は、そんな誤解を受けたくない自分を「注意深く監視し」(“I was always on my guard against any tendency to ... relapse” (391)) 意識的な努力を払って「非世俗的」に生きるよう努めてきたからである。だが、シルバーマンは結局、彼を「世俗的」と決め付ける不公平で非道な大人や世間の誤解を解くことはできない。

彼の努力と遭遇する事件を表面的にみるかぎり、この物語は、純朴な主人公と世間の無慈悲と偽善の対照がまずは際立つ単純な作品のように見える。しかしこの作品の真のねらいは、いかにも純朴な善人のようにみえる語り手の「非世俗性」に拘る自意識の解剖にある。彼の一見単調にみえる平板な語りは、語り手のそれとは意識せざる行動の歪みや心的傾向のアイロニーを韜晦する。その一方で自己の無垢を証しようとするはずの物語は、語り手自身の実は多義的な語りによって、彼の釈明の意図を覆し、彼の理解の未熟や心理的偏向を暴露するのである。その意味でこの告白物語は、人間の意識の分裂を扱う、小編ながら、テーマ、構成の工夫など、後期長編小説群にうかがえる関心や緻密さを有する作品なのである¹。

この物語の上記のような評価は、もっぱらフロイトやユングなど深層心理学的な観点の援用によって始まった。例えば Bart らは、この作品が『大いなる遺産』などに出てくる状況やテーマを共有していることに着目し、シルバーマンが *Great Expectations* の Pip や *Bleak House* の Ester 同様、周囲の大人たちによって過度の罪悪感を押し付けられた存在であると指摘している。ピップは、犯罪者 Branwell のようにかならずや不良になって、絞首刑になるに違いないと周囲の大人の根拠のない道徳的脅しに晒されるが、シルバーマンも同様、「世俗性」という言葉を乱用する周囲の人々の影響によって、過度な自己否定的意識を抱え込むのである²。Flamme によれば、シルバーマンは、ピップよりもその自己否定が深く深刻であるという。なぜなら自責感に悩まされたとしても、Pip にはそれを跳ね返す精神の反発力、あるいは自由さがあり、よって、自分の自尊心を回復することもできるのに対し、いわばシルバーマンは無抵抗なままで、自分を否定する意識を抱え込んでしまうからであるという。

Thomas は、シルバーマンの自意識に閉じ込められた状態について、彼の幼少期の、母親と

の情緒的接触を欠いた関係、環境に起因する、他者との交流のない社会からの孤立化が関連していると指摘した。またシルバーマンの非世俗的な利他的な行動、解釈には、基本的に他者の感情に対する理解や思いやりを欠いている点に注目し、他者と感情の交流のできない孤立の影響として、彼の認識の自己中心性を指摘し、孤立と彼の意識の偏向の関係について重要な示唆を与えた。

多くの批評家がシルバーマンの無意識に注目してきた一方、Butterworthは、もっぱらシルバーマンの意識の発達や自覚の深まりを考察している。そしてシルバーマンの問題を、人格発達の観点から、自分を常に「非世俗性」という観念に結びつけている自己観の誤りにあると捉えている。例えばシルバーマンは“justice”といった道徳的な資質と自分を結びつけようとはしていないことを指摘する(98)。実際シルバーマンは、自分の「非世俗的」性を証明する場合、ある状況における自分の行為とその動機にその根拠を見出しているが、自己のおかれた状況や他者との関係の現実について正確に認識しようとはしないのである。現実の複雑さに対する理解が乏しく、自分の理解する行動の意味と動機の解釈を、道義に照らすのではなく、自己中心であるかないかという単純な観点から判断してしまう。その短絡的浅薄さは、彼の認知の未熟さ、狭さでもあり、周囲の偽善者や計算高い人々に手玉にとられる原因を作っているのである。

こうした批評をまとめるなら、ディケンズがこの物語で扱おうとしていることがらは、まずは心理的な問題であるが、同時に道徳的な問題も関わっていることがわかる。また自己と他者の交流がその内面形成に密接に関わっているということだろう。Bodenheimerは、上記の成果を包括的にまとめ、シルバーマンの問題を以下のように要約している。

His continuing obsession with punishing himself for the “worldliness” of having essential needs for food, warmth, recognition, and love turns him into an isolated being whose secretive ways give rise to rejection and distrust in others. This is the story of an abused and neglected child who cannot grow out of the mental condition engendered by his early deprivation, in part because he cannot being himself to speak directly to other human beings, and in part because he is overly devoted to cherishing a beneficent image of himself. (88-9)

すなわち、母親に人間の飢えや暖かさ、承認を求める基本的な生理的欲求を否定されたことから「世俗的な」自己への過度な自責が固定観念化したこと。そしてその子供期の情緒遮断に起因する、他者との交流の乏しい社会的な孤立化、そのために生じた自閉的でいつも自信のない内気な態度や振る舞いが、さらに他者の拒絶や不信を招いていること。また幼児期に形成されたその心的態度から脱することができない成長停止。それは、彼が他者に対して誤解を解くために率直に語る力を持たず、道徳的で他愛的な自分のイメージに過度に執着するために起きている、というのである。

Bodenheimerは、ディケンズ作品における21世紀的関心の一つは、人間の内面探査にありその独特な知的な精緻さの特徴把握にあると述べているが(2-3)、本論では、そうした見解を

踏まえて物語を再読し、作家がその語り手の心の問題をいかなる文学的工夫を用いて表現しているのかその一端を検討してみたい。また、この物語は、別の角度からみれば、道徳性の確証の方法とは何かを検討する物語ともいえる。その問題を考察するのに、シルバーマンの自己証明物語のやや滑稽な部分に注目してみる。この作品には、喜劇的な要素はほとんど抑えられているのであるが、かすかにパセティックな滑稽さがシルバーマンにはあるように思われる。また関連してシルバーマンの後見人にして偽善の権化のような Brother Hawkyard を取り上げ、シルバーマンの自己確証の方法と比較を試みる。彼に対しては、語り手はことに顕著な嫌悪を抱いているのであるが、その理由は彼らのある種の共通性にあるかもしれない。そのことは、実はこのような心理的な作品を書いたディケンズの真の狙いを明らかにするのではないか。また、最後に、この物語において、なぜディケンズが英国国教会牧師を主人公とし、その心理解剖を試みたのか、その意図の一端に迫ってみる。それは、どうやらこの物語が書かれた1860年代にクローズアップされてきた英国国教会の諸問題、ことに牧師についての関心の隆起と切り離しては考えられないように思われる。

Ⅱ. シルバーマンの心理的問題とその表現の工夫

この作品におけるディケンズのシルバーマンの内面に関する考察には、いくつかの注目すべき特徴がある。例えば、自己否定の内面化過程を、身体感覚という点から書こうとしていること、また、社会関係における潜在的な体験が、多少の時間的遅れを経て、内面に転写されるように発現していることである。ディケンズは、そうした工夫を経て、問題を形成的に書いている一方、語り手の意識が介入し、時間的には、二重に重なる形で、彼の心理的偏向を書いている。また投射的イメージは長編小説におけるほど斬新ではないが、連想によって関連させられ、その心理的偏向が根深く持続していることを示している。

1. 身体感覚

さて最初に母親から彼が受けた否定が、身体的な感覚や反応動作によって表現されているということは示唆的である。身体感覚と隣接させて表現することで、意識されない心的傾向の歪の根深さを表現しえるからだ。また身体的表現は、象徴的でもある。この作品における数少ない投射的なイメージと連動して、彼が他者から受けた衝撃の根深さと、続く傾向が彼の人生に深く潜行して続くことを暗示している。

シルバーマンの幼少期の説明が、彼に最大の緊張を与える母親について多くを語るものであることはまず注意しておく必要がある。ただ奇妙なことに、母親の姿はまったく視覚的に見えてこない。プレストンのスラムにある地下室の家へ帰ってきた母親が階段を下りてくるにつれ、足、腰、胸とだんだんに表れて最後に見えてくるその顔の表情が「不機嫌かどうか」と怯えながら見つめていたという説明は、彼の緊張こそじかに伝わってくるような切迫感があるが、その直後に現れたはずの母親の顔は決して描写されないのである。その代わりに「骨ばった手が皮袋を絞るような」(“as by the compression of bony fingers on a leathern-bag”) 声のみが提示される。視覚と融合しつつも、肉体的な苦痛や脅威をもっぱら伝えるこの身体感覚的聴覚

表現は、彼の最初の他者の危険な存在の印象として強烈である。母は、その後、働かない父親に苛立ち、子供である彼を「髪を掴んで追いつく」(“Mother’s pursuing grasp at my hair” (380)) のであるが、やせ細った指がシルバーマンの体に今にも食い込むかのようなのである。

またこの母親は、彼が、飢えや寒さを訴えるたびに「世故い餓鬼！」(“Worldly little devil!”) と彼を罵るのだが、そのたび彼が「刺すような痛み」(“And the sting of it was” (380)) を覚えていることにも注意したい。彼は、この時点でこの言葉の内容を理解してはいなかった。彼の両親が熱病に罹り、彼の目の前で次々と亡くなったときでも、彼には「死」という事実も、またその言葉の意味も知らない精神的に未分化な状態にいたのである。したがって、その「刺すような痛み」とは、言葉の持つ意味ではなく、身体に近いところで直接的に感じる存在否定であったろう。そしてこの母親の「世俗的」という言葉は、以降、彼の意識に食い込んだ指のように、存在否定の記号となるのである。

ところで、彼はその母親の追い掛け回す指を「身をかかわして逃げ」ていたことも回想している (“I ... would faint and dodge from Mother’s pursuing grasp of my hair. (380))。繰り返して受ける身体的な脅威を回避するのは、自然な身体的な防衛反応である。だが、彼が肉体的な苦痛を与える母親から習慣的に逃げるその身体動作は、度重なる他者からの否定を体験を重ねていくにつれ、他者から距離を取り、他者の接近を次第に避けるようになるその精神的な他者回避に、深いところで繋がっているのである。

2. 他者の態度の転写

シルバーマンの内面が、他者との関係のうちに形成されていく様子を、作家はどのような工夫で表現しているであろうか。親を相次いで熱病で失ったのち、彼は、地下室の闇から日の当たる不特定多数の人々の作る町社会の只中に引き出され、そこで彼は、他者の眼の二重の否定に晒されることになる。病の原因をもっぱら *miasma* (瘴気) と見ていた当時の定見からすれば、彼をあたかも穢れそのもののように遠巻きにするのは仕方がないかもしれない。しかし無知と貧困のうちに育ち、両親の死を悼むことも知らずただ動物のように飢えを満たそうとするシルバーマンを彼らは「低俗さ」の塊として恐怖とともに見つめるのである (“[T]hey all looked at me in silent horror as I ate and drank of what was brought for me. I knew at the time they had a horror of me, but I couldn’t help it.” (381))。彼は、その社会の暗黙の否定の眼差しを、彼の内面の眼として無抵抗に受け入れてしまう。

そのことが明らかになるのは、彼が転地療養することになった Howton Towers においてである。家禽を見ても食糧にしか見えない、ただ旺盛な食欲を持つだけの自分を、シルバーマンは、肉体的欲求しか考えない “a small Brute” 「恐ろしい獣」として見、彼を見下ろす天空が、非難する表情を向けていると感じている。

I stayed there ... doubtful whether the shadows passing over that airy height on the bright spring day were not something in the nature of frowns; sordid, afraid, unadmiring, a small Brute to shudder at. (384)

空の陰りは、彼にしかめっ面を向けた社会の否定の眼差しと重なっている。自らを低俗な存在

として受け止め同時に、自分の低俗性を監視し、追い回すような修正の効かない罪の意識が定着してしまったことがわかるのである。

興味深いことに、そんな彼を、語り手は“young vampire”とも述べている。他者の生き血を吸って生きる化け物と形容し、その恐ろしさを表現するのであるが、もちろん当時のシルバーマンには、こうした語彙はないから、それは、回想する語り手の意識が介入したものであるとわかる。とはいえ、その介入は、後年に至っても、社会の無慈悲や自分の見方を非難する調子がない。つまり、過去の自分のイメージを修正することもなく、過去の傷をそのまま引きずっている成長停止を暗示するのである。

3. 孤立した意識とイメージの連鎖

シルバーマンの他者回避傾向や自意識の閉鎖については、どのように表現されているだろうか。ディケンズは、単にその傾向が定着していく要因を、他者の否定だけには求めていないようである。地下室から引き上げられたシルバーマンは、社会の彼に対する忌避の洗礼を受けたあと、一旦救貧院付属の病院に隔離されているが、彼はそこで、十分な食べ物と着替えと気持ちのよいベッドが与えられ、おそらく人生で初めての、肉体的満足と快適さを味わっている。ここで、彼はその病棟にいるはずの人間については一切言及していないことは注目に値する。隔離されていたのであるから、他者があまり周囲にいなくてもそれほど不自然ではない。が、彼はそこで初めて、彼を非難したり忌避する他者に煩わせられることない、孤独であることの深い安心と慰藉を体験したのではないか。だとすれば、そのような体験は、わずらわしい他者との緊張を避けるために他者の前から逃亡する傾向を助長するかもしれない。そのように考えると、やがて学校生活において、友人と交わらず、また敢えて友達も作ろうとしないその行動についても、彼自身の半ば意識的な選択があると理解したくなる。

もちろん彼の説明よれば、内気な傾向が形成されたのは彼が始めて他者を思いやろうとした行動が理解されず、思いがけない非難にあったという Howton Towers ででの経験がきっかけになっているのである。しかし、上記にみたような快適な孤独の愛好は、Howton Towers において始まっているともいえる。シルビアを自分の熱病から守ろうとする利他的な動機から行った犠牲的行為においても、むしろ同様の動機を伺わせるものである。というのは、シルビアに自分の熱病をうつさない手段として、食事のときに顔をあわせないよう食事の時間をずらすのであるが、実際には、彼は、早朝から夜彼女が寝るまで、Howton Towers の廃墟の隅で過ごすのである。その行動は、Thomas も指摘しているようにパーティへの招待を断った次の夜、Howton Towers の廃墟の闇から、明りのともったパーティ会場を見つめつづける彼の様子と共通する。彼は、他者から遠ざかった安全な距離から、ようやく、他者への思いに浸ることができるのである。彼の孤立の闇は、あたかもわずらわしい他者に対する不安を和らげ、隠す心地よい闇のようである⁴。

孤立した自我意識の闇に引きこもる彼の傾向は、Howton Towers の散策の間に、彼が見かけた壊れた階段裏の穴に逃げ込むネズミと重なる。彼は、そこで、暗い穴の奥で餌食を取り合うあさましいネズミの姿に地下室で暮らした過去の自分を思い出し、嫌悪すべき過去との決別

を強く意識するようになる。しかし、にもかかわらず結局彼は闇を好むネズミなのである。ネズミの闇への逃避する行動は、プレストンの地下室の闇に繋がって、シルバーマンの退化を暗示している。光を避けて心地のよい孤独の闇を愛好することは、彼をますます自意識の闇に閉じ込めることになる。なぜなら、他者との交渉においてしか、人は自分の意味あるイメージを正しく持ちえないからである。一方的に引き受けてしまった自己否定的なイメージを変えることもまた、他者との交渉によらなければ修正できないのだ。よって、不吉な闇は彼にとっては、警告をも意味しよう。

彼の盲目性を警告するような、投射的イメージはもう一つある。それは、Howton Towersの美しい自然についての美的情緒体験、荒廃と対照的な、生命の輝きに満ちた自然の美を知る感動の只中において、突然彼の意識に現れた幻想—その廢墟にかつて集った過去の亡霊たちである。

...I discovered a gallery commanding the old kitchen, and looked down between balustrades upon a massive old table and benches, fearing to see I know not what dead-alive creatures come in and seat themselves, and look up with I know not what dreadful eyes or lack of eyes, at me. (385)

ディケンズの作品における眼のイメージは、よく登場人物の内面の反映となる。その慣例に従うなら、その恐ろしいまなざしの亡霊は、当然、あの空の目と同じように、否定的な自分を監視する自我意識の投射であろう。だが、その幽霊には「眼がない」。そのことは、シルバーマンが囚われている状況に対して何より、盲目であることを暗示している。

Ⅲ. シルバーマンの滑稽—その無罪の確証とホークヤードへの嫌悪

この章では、彼の非世俗的自己の証明に関わるいささか滑稽な印象を中心に、シルバーマンの問題について検討する。というのは、その滑稽さこそは、彼の良き自己に対する固執の程度と無罪の確証の方法の間違いをよく示すからである。たとえば、シルバーマンは、彼の初めてのシルビアに対する他愛的な行為については、それが自己犠牲的なものであったことを次のような言葉でほのめかしている。

Out of this holding her in my thoughts, to the humanizing of myself, I suppose some childish love arose within me. I felt in some sort dignified by the pride of protecting her, by the pride of making the sacrifice for her. (386)

この幼な恋への言及は、いささか唐突で、また奇妙なのである。というのは、それはまるで、David CopperfieldがLittle E'mlyに対して抱いたような、ロマンチックな恋愛観念、自己犠牲を持って女性に尽くし、その保護をもって任じる騎士的恋人の恋愛観であるからだ。シルバーマンはこの時点で、Davidのように、騎士物語に親しんでいるわけではないから、これは後年

の話者の勝手な介入であろうことは疑い得ないのである。実際、後の誤解事件の発端となったシルバーマンのアデリーナに対する恋愛感情には、同種の自己犠牲的恋愛観が見られるのである。だが、ここで問題なのは、ロマンチックな語り手シルバーマンの介入でもなければ、もちろん捏造でもない(彼は捏造をする人間ではない)。当時の彼に、自己の精神的な目覚めのきっかけとなったシルビアに対しては、好意めいた感情が生まれたことは否めないし、また何より、彼は彼女のために自己犠牲を払ったのも事実だからである。だが、興味深いのは、その自己犠牲行為の実態なのである。実態とは、もちろん、食事の時間をずらしたことであり、それなりの飢えを我慢したということだ。だが、食事の時間をずらすということは、自己犠牲なのだろうか？だが、彼は真剣にそう思っているとしか考えられない。とすれば、その滑稽は、実に重要である。事柄の現実全体からみると、彼の自己の行為に対するこの解釈は、いかにもバランスを欠いて大げさであることをよく示すからである。つまり、彼の良き自己イメージは、現実に基づくのではない主観的な解釈に依存しているのである。そして、その粉飾をする語り手シルバーマンも、自らの滑稽さを客観的に見ることができない点で、自己憐憫的で感傷的な存在であることがわかる。

現実をみないまま自己のイメージに溺れるのは、このときばかりではない。後見人ホークヤードによるシルバーマンの祖父の財産横領を、彼の属する宗教団体の同志 Gimlet がチャペルにおいてほめかした時、シルバーマンは、長年疑ってきたその可能性を暴く機会を眼の前にしながら、そのような疑いを持つことこそが自分の穢れた「世俗性」の故であるとして、その疑いを退けてしまう。のみならず、ホークヤードに敢えて感謝の手紙を渡してさえている。それは、孤児となった彼を引き取った行為が、ホークヤードの善性の証であると考えからなのであるが、あまつさえ、彼は、そのことを記した感謝状をもって、ギムレットにかけられた嫌疑からホークヤードを救済するつもりになってしまう。ところが、この二人は実は、横領を結託する相談を進めているところなのであった。現実と乖離した、彼のそのあまりにも単純な見解、救世主気取りは、前述のエピソードと同様、滑稽である。他者に害意を持つわけでもなければ、偽善を働いたわけでもない彼は、確かに善人である。が、現実を自分にとって都合のよいように単純化しているという意味では偽善者にも似るのである。現実が見えない存在は、悪人によって簡単に陥れられてしまう。この二人の悪人によって、彼の親切な思惑は逆に彼の忘恩と傲慢の印とされて、彼らの悪を隠すための道具に使われてしまうのである。

他者との関係の現実から逃避すればするほど、彼は単純で純粹でいられる。よって彼は学校生活でも友達を作らない。勉強だけに勤しみ、もって一向に他者や現実と交渉をしないまま、やがて奨学金を得て、ケンブリッジに進み、推薦を得て聖職者となるも、彼はその知的向上にもかかわらず、自らの偏った非世俗性を単純に守っていくばかりなのである。その結果、彼の転落を招いた誤解事件を引き起こすことになる。彼の教区の属する所領を持つフェアウエイ夫人の娘アデリーナに、自分の無垢を評価され、好意を寄せられるが、決してそれを受け入れることも、まして彼女に己の好意を打ち明けることもしない。あたかもその関係が現実化することで陥るわずらわしさから逃げるように、彼は、彼女に相応しい身分を持った若い男性として彼の生徒である Granville をシラノ・ド・ベルジュラックよろしく、自分の身代わりとして選

び、彼女の好みに合うように仕立て、彼の彼女の関心を彼へと向けさせ、やがて結婚へと誘導するのである。一連の経緯で興味深いのは、もはや以前の彼とは異なって、社会的地位や磨かれた知性を持ち、またケンブリッジにおいて個人教師として培った若者に対する指導力、理解力を利用して、金銭目当ての結婚でない純愛に基づく恋愛結婚へと二人をみごとに誘導している点である。だが、一方で、彼は、あまりにも、自己犠牲的な寛大な自己イメージに酔っていて、状況の現実的認識を欠いている。実際、アデリーナの母親、フェアウエイ夫人の勝気で権柄づくの性格や立場に思い至らないために、夫人の激しい復讐心の的となり、彼は世俗的金銭欲のために若者の勝手な結婚に加担した不屈きな聖職者として弾劾されるのである。彼はもし正当な意味で道徳的であろうとするなら、自分のおかれた現実について正しく認識した上で、その行動や態度を明確にする必要があった。

ところで、先に触れたように、彼の良い自己のイメージ解釈には、ホークヤードの自己欺瞞と比較対照してみると、奇妙な類似が浮かび上がっているように思われる。シルバーマンの無私で寛大で純粹だという非俗的な自己イメージは、現実から遊離した救済者気取り、あるいは騎士気取りに過ぎない。それは見識の狭さからくる無心な思い込みであるが、やはり虚偽なのである。

シルバーマンはホークヤードに顕著な嫌悪を抱いている。それは、まずは、彼の偏った信仰とかかわりがある。英国国教会には属さない、分離派教会の一員である彼の教派は、原罪をやたらに強調する狭い教義に縛られたヒステリックな集団である。互いにブラザー、シスターとよびながら、(ギムレットとの関係にも現れているように、共犯ではあっても)、まったく友愛の関係にはない。ディケンズが何より嫌った宗教とは、長々とした儀礼や狭い教義に拘る内実のない宗教であった。ために、シルバーマンのホークヤードへの嫌悪はまずは、作者の偏った宗教へ嫌悪を共有するものと考えられるのである。だが、今少し注意してみると、シルバーマンのホークヤードに対する嫌悪には、彼自身の心理が関係しているように思われる。

シルバーマンのホークヤードに対して覚える嫌悪感は、ホークヤードが繰り返す、次のような神概念にも関係している。

”I have been the best servant the Lord has had in his service for this five and thirty years, O I have! and he knows the value of such a sevant as I have been to him, (O yes, he does!) (and he'll prosper your schooling as a part of my reward. That's what he'll prosper your schooling as a part to my reward. Tha't what *he*'ll do, George. He'll do it for me.

ホークヤードは、*Our Mutual Friend* に登場する Podsnap と同様、計り知れない「神意を、自らの勝手範囲におき、よって、彼はいつも神意を正確に知っている」(“...to take Providence under his protection. Consequently he always knew exactly what Providence meant.” (175))、「度外れた傲慢」と、無恥厚顔の徒である。自己の道徳性について、いつも不安であるシルバーマンにしてみれば、自分の非世俗性、正しさの保証を、最も崇高な絶対者に手前勝手に求めて

平然としているホークヤードの考え方は、確かにあきれ返りこそすれ、自分と似ているとは思えないであろう。

From the first I could not like this familiar knowledge of the ways of the sublime inscrutable Almighty, on Brother Hawkyard's part... His manner too, of confirming himself in a parenthesis, —as if, knowing himself, he doubted his own word, —I found distasteful. (388)

とはいえ、シルバーマンは「自分のことを知りつくしながらも、なお自分の言葉を疑っているかのような、括弧に入れて自分の言葉を確認してゆくその話し方も、いやでたまらなかつた」⁵というのである。それは、虚構の自己に対する無意識の依存を、彼の韜晦に感じるからではないだろうか。ホークヤードは、シルバーマンの鏡像として不安を煽り、嫌悪を催させるのではないか。

シルバーマンの、彼の過度な自責感と非世俗的の自己イメージの曖昧性に心理的に注目するならば、ともすれば、この物語が備えている微妙な風刺性、道徳的関心を捉えそこなうように思われる。彼はやや滑稽でもあり、パセティックでもある。作家は、そのような彼の錯誤の的外れな意識を通して、浅薄な道徳観の上滑りな内容、内省の不足を警告しているとも見ることができよう。他者との交流のない孤独さゆえに自己欺瞞に陥る彼は、当然、ホークヤードのような害意のある、臆面もない意図的な偽善者とは、根本的に異なるものといえよう。しかし他者と自己との交渉を持たない孤立した心理傾向を抱いているとはいえ、現実の人間関係において、真実を愛する道義への熱い思いが欠如しているために、自己の安易な善のイメージに依存しているシルバーマンは、英国国教会牧師という立場であるだけに、ホークヤードに一脉通じる虚偽があることは、問題ではないか。

Ⅳ. トロロップの『英国国教会の牧師』

1866年、牧師を主人公とした一連の長編小説群を書き終え、そのバーセット小説の最後の作品を書く直前、Anthony Trollope は、*Pall Mall Gazette* に *Clergymen of the Church of England* というエッセイを連載したが、それは、発表当時それなりの物議をかもしたのであった。トロロップは、1835年以降の教会改革の流れのなかで、変ってきた聖職者や彼らをめぐる制度について、中庸を得た批判を書いたはずであった。実際彼は、彼の旧来の制度や気風への支持もしめしており、また問題ある現在の制度についても激的な批判をしたわけではない。また、教会に政治が介入してゆくに連れ、人々の道徳から宗教性が薄れ始めた時期であったとはいえ、英国国教会について改革を語ることは、やはりそれなりの騒ぎが巻き起こる状況であった。そのような1860年代であることを考えると、ディケンズが、この小品で、英国国教会牧師を主人公としていることは、少し背景とともに考えたいのである。まして、先に見たように、善人ではあるが、実は、強い道義心もなく、自己憐憫に溺れやすく一方で、根柢のない自責感につきまわっている牧師である。そこに、教会を失いつつあった社会へのディケンズ特有の関心があったとみることは、あながちまちがいでないだろう。

トロロップは、そのエッセイのなかで、聖職者たちを立場に分けて、それぞれに属する代表的なキャラクターを書いている。一方、ディケンズは、この小品のなかで、いわば、一人のあのパーソナリティを描き、批判を抑えて心理解剖をしたのである。ただ、ディケンズの場合、そのパーソナリティの解剖は、彼の心の持ちようを深く探求する特殊なケーススタディであるとともに、実際には、時代に欠けている態度は何かをはっきりと知らしめる物語になっているとはいえないか。つまり、この作品は、そのような意味で、ディケンズなりのやり方で、おだやかに英国国教会牧師にその内省と資格再考をそれとなく促す作品となっているといえるのではないか。

ディケンズの、語り手のシルバーマン師に対する態度は客観的であるが、批判的というよりはより共感的であるということは、付け加えなければならない。彼は、冒頭にも述べているように、「いかなる欠点も包み隠さず述べる」告白物語を書いたからである。もしシルバーマンが、自己の無垢の釈明を目的としてのみ書くなら、彼は求める自己イメージを意識的に強調する成長物語を書けばよかった。しかし、彼は、目的的に操作的には書かず告白を書いたのである。彼は最後まで自分の語りの曖昧さの正体を知ることはできない。しかし彼なりに正直に書くことで、自分では気づかないままに、自己の姿をその問題とともに他者である読者に開示しえたともいえるのである。その素朴な正直さのゆえに、作家は、この語り手に共感を寄せているといえるのである。

注

1. ディケンズは、この小説の原稿を半ば完成をみた時、編集者に宛てて書いた手紙のなかで、この作品のオリジナリティーと興味に触れ、この作品についての再読した感想を添えて“*And I feel as if I had read something (by somebody else) which I should never get out of my mind!!!*”「あたかも自分で書いたのではなく、他の人が書いたように思える」と述べ、語り手のあるパーソナリティを完全な形で髣髴とさせることができた手ごたえを語っている。となれば、この物語の平板さ、単調さの印象は、むしろ、周到に準備されたその結果といえるであろう (*Letters*, 385)。
2. Strohmによれば、彼らは public morality「公共道徳を文化として」しまったヴィクトリア朝時代の落とし子であるという。画家 William Holman Huntの描いた *The Awakening of Conscience* (1853) がその代表的な例であるが、当時の人々は「良心」や「世俗性」「非世俗性」といった言葉を好んで用いた。当然そのような文化のなかでその意味合いは浅薄であったから、乱用は人間疎外を生むのである (59-60、51-54)。
3. しかし、これらの内的発達、彼のその後の学校生活でのさらなる知的発達、あるいは、職業的、社会的発展と同様、彼の自己についての認知の歪みや、彼の心の癖についての是正には、なんの貢献もしないのである。知性の発達、自然に対する情感や感性の広がり、彼に新たな感情や観念をもたらす人生における選択肢を広げたともいえる。しかし、それは、他者と自己の関係に関わる彼の社会不安、そこで形成された心的な歪みや心の癖は、観念の上塗りやをされることはあっても、根本的な態度の変化を促すことはないのである。
4. Howton Towersの農家の少女シルビアは、母親が彼に与えたような肉体的な脅威を直接的に与える存在ではない。彼女は、Howton Towersで始めて食事をしたときに、「狭いテーブル」越しに彼の前に座っていただけである。しかしその最初の食事の直後から、彼は、彼女に会わないように食事の時間をずらすようになるのである。シルバーマンは、その動機の由来をはっきりとは説明できない。ただ、彼女に自分の「穢れ」である病気が移ったら彼女は死ぬだろうと考え、ぼんやりと「彼女を避ければ、

それを阻止することが出来るだろうという考えが浮かんだ」というのである。確かに、誰に強制されることも無く、そのように感じたことは、彼もいうように、彼女を「守ろうとする」利他的な思いつきであろう。しかし、その気持ちの裏側で、他者と相対する食事を負担に感じ、こちよい孤独へと逃走する衝動にうながされていたということはないであろうか。シルバーマンはそのとき以来、Howton Towersの廃墟の隅に「早朝から隠れ、夜になるまで、誰にも会わずにいる」のである。シルビアは、対面を避けて一人で食事をする彼に対して誕生パーティに招待をしようとする開放的で外向的な人柄であることを考えると、他者に対して潜在的な恐怖を感じている内向的な彼には、相対するにはあまりにも耐え難い眩しい存在であったのではなかろうか。

5. 和訳は小池滋『ディケンズ短篇集』（岩波文庫 1986年）を参照させていただいた。

引用／参考文献

- Bart, Barry D. "George Silverman's Explanation." *Dickensian* 60 (January 1964): 48–51.
- Bodenheimer, Rosemarie. *Knowing Dickens* New York: Cornell U. P., 2007.
- Butterworth, R. D. "Howghton Tower and the Picturesque of 'George Silverman's Explanation.'" *Dickensian* (1990): 93–104.
- Dickens, Charles. "George Silverman's Explanation." *Charles Dickens: Selected Short Fiction*. Ed. by Thomas, Deborah A. Hammondsworth: Penguin Books, 1976.
- . *Great Expectations*. London: Penguin Books, 1985.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House, Graham Storey, Katherleen Tillotson, et. al. The Pilgrim Edition. 12. Oxford: Charendon Press. 2002?.
- Flamm, Dudley. "The Prosecutor Within: Dickens's Final Explanation." *Dickensian* 66 (January 1970): 16–23.
- Stone, Harry. "Dickens's Tragic Universe: 'George Silverman's Explanation.'" *Studies in Philology* 55 (January 1958): 86–97.
- . *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity*. Chelsea: Ohio State U. P., 1994.
- Strohm, Paul. *Conscience: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford U.P., 2011.
- Thomas, Deborah A., ed. *Charles Dickens: Selected Short Fiction*: New York: Penguin Books, 1976.
- . "Equivocal Explanation of Dickens's George Silverman." *Dickens Studies Annual* 3 (1974): 134–43.
- Trollope, Anthony. *Clergy of the Church of England*. 1866: Leicester: Leicester U. P., 1974.
- Walder, Dennis. *Dickens and Religion*. London: George Allen & Unwin. 1981.

(原稿受理 2011年9月20日)